

政経 かながわ

— 神奈川政経懇話会 —



県内の花の名所の一つ、二宮町の吾妻山公園で菜の花が満開となっている。頂上（標高136.2^{メートル}）西側の斜面に約4万5千株の黄色いじゅうたんが広がり、眺望とともに来園者の目を楽しませている。「2月中旬まで楽しめそう」と同町観光協会。



視点・点描	3
鉄人レースの海を美港に	
講演録	4
「強靱」な日本国家を構想する ～『東日本復活5年計画』と『列島強靱化10年計画』 京都大学大学院工学研究科教授 藤井 聡	
政治反射鏡	9
消費増税は公約違反？ 借金解消は新産業育成で	
経 済	10
保育事業に続々新規参入 鉄道会社と学習塾連携、生保も	
くらし2012	12
音楽家の手に専門外来	
広告珍談	14
～キキメある人と顔と 巨体のキキメ？	
経済ニュースから	15
神奈川新聞の経済ニュース	

事務局だより

◇横浜定例講演会

2月9日(木)

17時～18時30分

横浜ベイシェラトンホテル

講師は横浜市長の林 文子氏。

演題は「心を動かすリーダーシップ」

◇神奈川TOPセミナー

3月12日(月)

ホテルニューグランド

富士ゼロックス神奈川株式会社と共催。

▽特別講演＝15時半～16時40分

講師は前全日本女子バレーボールチーム監督の柳本晶一氏。

演題は「組織を成功に導く女性人材の活用術」

▽基調講演＝16時50分～17時50分

講師は松下政経塾理事長兼塾長の佐野尚見氏

演題は「松下幸之助と松下政経塾」

▽交流会＝18時～

視点 点描



鉄人レースの海を美港に

多少なぞなぞめいた話になって恐縮だが、2009年の横浜開港150周年をきっかけに、横浜に定着しつつあるスポーツイベントがあるのをご存じだろうか。答えは、横浜港の観光名所の一つ、山下公園周辺を会場にしたトライアスロンの国際大会である。

開港150周年事業の一環として09年8月に初めて開催された。2回目は2011年。そして

今年3回目の横浜大会が9月29、30の両日、やはり同公園周辺を会場に開かれる予定だ。

横浜の名を国内外にアピールする国際的なイベントとして今後もある。末永く開催されることを望むが、当初から少々気になっていたことがある。それは、スイム（水泳）競技のために鉄人たちが勢いよく飛び込む、同公園前の海域の水質問題である。夏場には赤潮などが

発生することもあり、お世辞にも「良好」とは言い難いからだ。

そこに世界からアスリートを招くわけだが、果たして気持ちよく競技をしてもらえるものか。横浜大会が継続開催されているところをみると、水質が大会の招致や運営上で大きな障害とはなっていないようだが、それでも、ホスト役の横浜市民としては少しでもきれいな海で選手らを迎えたいものだと常々考えていた。

そんな横浜流のもてなしを実践しようという心強い官民連携の団体が昨年、市内で産声を上げた。

「世界的美港都市横浜をつくる連絡協議会」である。同会が掲げるのは、「世界に冠たる美港都市横浜の創造」。もともと横浜には開港の歴史と文化という資産がある。そこに「美港」の名にふさわしい水環境や景観、親水空間など、

これまで欠けていた要素を徐々に加味して港の魅力を底上げ。いずれば世界五大美港（サンフランシスコ、シドニー、香港、リオデジャネイロ、ケープタウン）に肩を並べ、最終的には「六番目の美港」としての認知を受ける。そんな青写真を描いている。

鉄人たちの競技の場ともなる港の水質改善も、同会が掲げる目標の一つだ。それには空素やリンなどを含んだ生活雑排水が海に流れ込むのを防ぐ総合的な水質改善のプランを立てたり、水質浄化作用を有する干潟や浅瀬の再生といった、重層的な取り組みが求められる。しかも、効果が出るまでには時間もかかる。鉄人レースの参加者並みの持久力と強い意志で、故郷の港を美港へと近づけたい。

（神奈川新聞社
統合編集局次長 宮本 敏也）

巨体のキキメ？

前号に紹介した岸田吟香の体重は、23貫目＝86.25kg。その巨体を自分の広告のアイキャッチャーにして、キキメがあった。

吟香は1833（天保4）年、津山の生まれ。江戸にて苦学、風呂屋で下働き。本名の銀次から

ギンコーと呼ばつけられ、ならば吟香にと。目をわずらつて、横浜の医師へボンの治療をうけた。完治したが定職なし、才覚をみこんだへボンは住み込ませた。午前中は診察や調剤の手伝い、午後は日本語と英語の対訳にはげむへボンの助手をする日々。

日本最初の和英辞典『和英語林集成』を編纂する、へボンとともに上海へ。英字の活字はあつても、平仮名とカタカナはない。吟香はツゲの木に1字ずつ彫り、鑄込んで

で活字づくり。68（明治元）年11月、辞典は横浜の丸屋（丸善の前身）から発売された。ローマ字綴りが、へボン式ローマ字と知られていった。

吟香はそれだけではない。アメリカ帰りのジョセフ・ヒコと、『海外新聞』を横浜で創刊したのは65（慶応元）年。アメリカ人ヴァン・リードと、『横浜

新報もしほ草』も創刊。どちらも和紙に木版刷り、和綴じの新聞。外国のニュースを翻訳し、記事を書き、売り歩いた。まだあつた。水室屋を開いた。油田開発の計画

もした。横浜・江戸築地間の蒸気船のオーナーにもなった。さらに

東京日日新聞へ入社したのは73（明治6）年、日本最初の従軍記者として台湾へ。読みやすい記事

で読者が倍増、部数が拡大した。ギンコー!! よくやったと言っ



私の今日出帆の郵船東京丸も乗込み支那へ精錡水を賣り弘め参ります先年より

少々づゝ相弘まり遅々支那全國へも弘まりをうち摸様も此たび私が参りまして一種發するつもりなれば我が日本の精錡水は取次の方々も此うへ一層勉強のほど願ひ上奉ります

精錡水本家 東京銀座二丁目 岸田吟香拜

たかどうか知らないが、へボンから西洋目薬の調合法を教わった。精錡水と名付けて、横浜に薬店「樂善堂」を開業した。そして「御めぐすり」この目薬はアメ

リカの名医へボン先生より伝法の良剤にて世にありふれたる売薬の類に「ならず」と、横浜毎日新聞（最初の日刊紙）に広告したのは66年。なにしろ眼病になやむ日本人が多く、へボン直伝は絶大な効果。繁盛して75（明治8）年、東京銀座2丁目「精錡水本舖樂善堂」を開業。

新聞の威力を知り抜いていた彼は、フルに活用する。おかげで目が治ったと読者の投書と見せかけた記事広告。実際は行われてないが、効用の講演会を数回の記事広告で掲載。純朴な庶民をあおった。そして自分で自分を描いた巨体のキャラクター。上の広告は横浜から出帆する船で、中国へ売り込みに行ってきますと…。それだけで十分、キキメがあった。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）
（図）岸田吟香の広告・1880（明治13）年1月、東京日日新聞掲載